

「ダビデ、油を注がれる」(サムエル上二六章一〜二三節)

1 サウルからダビデへ

先週はルツ記を取り上げました。ダビデの生涯を辿る私どもの試みの、いわば序章として読んでみたのです。

その中で、いまあらためて印象深く思い起こすのは、ルツ記の舞台がユダヤのベツレヘムだったということです。

ベツレヘムといえば、私どもにとってもなじみのある地名です。イエス・キリストがお生まれになったところですよ。野宿しながら羊の群れの番をしていた羊飼いたちが救い主誕生の知らせを聞いて、見に出かけた、拝みに出かけた、それがベツレヘムでした。

聖書では、ベツレヘムという地は、ダビデの一族及びその友人たちとの関連ではじめて注目されるようになったところで、それ以前はあまり出てきません。紀元前八世紀の預言者ミカはベツレヘムはユダ氏族の中でもっとも小さいものといっています。しかしそこから、神のためにイスラエルを治める人が出るとも預言されていたのです(五・一、マタイ二・六)。

今日の聖書箇所、預言者サムエルがベツレヘムのエッサイのもとに遣わされることで、ベツレヘムがあらためて脚光を浴びることになります。エッサイはルツの孫に当たります。そのエッサイの八番目の子、末の子が、ダビデです。神の救いの歴史、はるかにイエス・キリストにいたる大いなる歴史が、小さな地ベツレヘムと、ダビデの選びを介して始まるのです。

紀元前一〇世紀、神の民イスラエルは、士師と呼ばれる、神から特別の賜物をいただいて、時々出現する指導者によって治められる時代から、王によって治められる時代が変わっていきます。この時代をリードしたのが、サムエルという人物です。彼は士師の一人でもあり、預言者、また祭司でした。彼のもとでイスラエルは王制に移行します。

王制をしく、つまり王をいただく国になるということについて、サムエルと民とのあいだで相当の軋轢があり、じつはまったく容易なことではなかったのです。民はサムエルが年を取ったこと、またその後継者たる息子たちも、父のようにではない、真実に歩んでいないことなどを理由に、サムエルに、他国と同じように、王を立ててくれるように要求するのです。王によって治められるふつうの国になりたいというわけですよ。その背景には、イスラエルに対するペリシテ人の圧迫が大きくなったことがあります。国を強くしなければならぬと。しかしこの民の願いは、サムエルの目には悪にしか映りませんでした(八・六)。その理由は、よその国はいざ知らず、イスラエルは、主なる神が王であって、人間の王を求めることは、神を捨てること、他の神々に仕えることに等しいというところにあります。しかし民はいうことを聞かず王を求めます。結局サムエルは、王をいただくとはどういうことか、はっきり警告した上で(たとえば王の下で息子たちは兵士としてかり出され、娘たちも徴用され、結局は奴隷にされる、選んだ王のゆえに「泣き叫ぶ」(八・一八)ことになるというような警

告)、民の要求を入れる形で、主なる神の「王を立てよ」(八・二二)という命令に従い、王を立てることになります。

こうして選ばれ、立てられたのが、イスラエルの最初の王サウルです。しかし早い段階でサムエルはサウル王に不信感をもったようです。そのきっかけとなった出来事の一つが一三章にあります。

ギルカルでの出来事です。私の言葉で簡単に申し上げれば、こうです。ギルガルでサウル王は強力なペリシテ軍を前にしていました。兵士もみなおのいています。その少し前サムエルは、サウル王に、じつはこう命じていたのでした(一〇・八)。私もギルガルに行く。七日間待っていてほしい。そして行って神に犠牲をささげ、それからなすべきことを教えようと。しかし七日経ってもサムエルは来なかった。そこでサウル王は自ら犠牲を献げたのです。献げ終えたとき、サムエルがきます。そしてサムエルは、サウル王に、あなたは愚かなことをした、主の戒めを守らなかった、それゆえ王権は続かないと宣告するのです。

この話、現代の私どもから考えれば、七日経ってこなかった、約束を破ったのはサムエルのほうで、来なかったのがサウル王が、なるほど祭司ではなかったとしても、神に犠牲をささげ、勝利と加護を祈るといふのは、やむを得ないと考えるかも知れない。しかしそうではない。犠牲を献げるのはサムエルで、サムエルからなすべきことを教えてもらうのです。サウル王は待たなかった。サムエルを待たなかった。つまり神を待つことをしなかった。それが聖書の見方です。

2 神の見方、人の見方

サウルはおよそ二十年王位にあつたのですが、いま申し上げたようなこともあつてサムエルはかなり早くからサウル王を見限っていたふしがあります。仲違いは決定的で、死ぬ日まで再び王に会おうとしなかったとも、今日の箇所直前に書いてあります(一五・三五)。サムエルがベツレヘムに向かう、遣わされるのは、それと深く関係します。

主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエツサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした」(一節)。

この最初の節で一つ気がつくのは、神は、王制そのものを、この際だからやめて前に戻そうとしていないことです。

かつて王制に移行するとき、人間の王をいただく体制に移行するとき、サムエルが懸念を表明していた、しかし民は耳を傾けようとせず王を求めたという事情のあったことを私どもは知っています。しかしサウルがダメだったからといって、体制ももとに戻すというようにはならない。王を立てる(八・二一)、これが神の変わらないみ心であり、神の民イスラエルの新しい秩序でした。

今日の聖書箇所は、ダビデが聖書ではじめて登場するところです。登場するといっても、彼の言葉もここにはありませんし、あくまで「見いだされた」者、「連れてこられた者」としてです。「羊の番をしていた」少年ダビデを紹介するという意味もあります。油が注がれますが、のちにユダの王に即位したとき、三十歳のとき、もう一度民の前で油を注がれたときと違って、今日の箇所の油注ぎは、神の選び、期待、を意味することとして、密かに、家族とその関係者のあいだでなされたものです。主の霊は激しく降ります。

ところで、どのようにしてサムエルは、ダビデを選び出したのでしょうか。今日の箇所の後半を読んでいると、サムエルがイヤホンを耳にあて、むろん彼にしかな聞こえないわけだけれど、それで神から、これは違う、これも違うとささやかれている、それをサムエルが聞いている、そんなイメージです。そうした中で、サムエル自身どころが一瞬動いた人がいました。長男エリアブです。

彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映るところを見るが、主は心によって見る」(六〜七節)。

「サムエルは・・・思った」とあります。彼こそ油注がれるべき者だとなぜ「思った」のかを、主の言葉が明らかにしています。サムエルは、「容姿や背の高さに目を向け」たのです。「目に映ること」を見たのです。主なる神ご自身が人を「人間が見るようには見ない」といっています。「主は心によって見る」。かつて、容姿だけでなく、背が高いことをもってサウルを王に選んでしまったサムエル自身の痛恨の思いもここには隠されています(九・二、一〇・二三)。神が見るところと人の見るところと、それが違うということ、人を見る物差しが神と人では異なっているということ、それは旧約聖書のいたるところで(詩編、箴言など)イスラエルの神信仰として引き継がれ、はるか新約聖書にまで響いている考えの一つです(ルカ一六・一五、使徒一・二四)。

3 これがその人だ

そこでダビデに白羽の矢が立った場面をあらためて読んでみます。

サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか」。「末の子が残っています、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません」。エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ」(一一〜一二節)。

ダビデは八番目の子、上の七人とはまだ同じに扱われていない少年にすぎない。また七というのが完全数だとして、八番目というのは、その外、重んじられていないという意味もあるという人もいます。「血色が良く、目は美しく、姿も立派で」というのは結果であって、要は、彼こそ、サウルに変わって王として選ばれた人であったというのです。神が選んだ、神が立てた、それ以外のところにダビデが選ばれた根拠はないのです。

その関連で、「その子がここに来ないうちは、食卓には着きません」というサムエルの言葉に注意したいと思います。「食卓には着きません」というのは、選出の作業がまだ終わっていない、継続中ということです。「彼がここにやってくるまで私たちはこのまま輪を閉じずに行きましょう」と訳しているのもあります。町の長老たちもそこに来ていた。彼らもみな、いわば「立ったまま」（ブルッゲマン）、この名も知られぬ、八番目の息子が来るのを待っています。牧場で羊の番をしている少年がここにくるまで待っているのです。

サムエルも、長老たちも、そしてエッサイとその家族の者たちも待っています。救いが来るのを待つのです。神はダビデを選び、彼によって救いの業をなそうとしています。私どもも信仰をもって、それを待ちます。それが（待たなかったサウルと異なつて）私どもの在り方です。

今日の箇所を読みながら、思い出した新約聖書は、いくつかありますが、その中から二つあげたいと思います。

神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです（第一コリント一・二八）。

天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました（エフェソ一・四）。

どちらも選びということに関する聖句です。今日のダビデの油注ぎの出来事を考えると、第一コリント一・二八などを私どもは思い起こします。末の子の、羊の番をしていたにすぎない少年ダビデが、しかし選ばれて、見込まれて、神の救いのわざに用いられようとしています。私どもも、知恵があるから、能力があるから、家柄がよいから選ばれたのではないのです。自分の中に選ばれる理由がないとしたら、それはただ神の恵みによります。

選びは神の愛です。エフェソ書がそれを明らかにしています。この愛はキリストにおいて永遠から私どもすべての者に注がれています。キリストにおいて、私どももまた神の子となるように選ばれているのです。

選びは何のためでしょうか。それは神の地平に、神の救いの歴史の中に、自分を見出すためです。そして神の栄光に仕えるためです。私どもも、ダビデと同じく、選ばれ、信仰によって立たしめられ、世に遣わされます。選ばれたことを、過分の恵みを、感謝をもって受けとめて、主の栄光をあらわすために歩んでいきたいものです。